

# 音楽科

温井 礼恵

## 音楽科における学び続ける子供とは

音楽科における学び続ける子供とは、音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽活動の楽しさを実感し、音や音楽と豊かに関わり続けようとする子供である。

### 1. 目指す姿

音楽科において、子供が学び続けていくには、音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽活動の楽しさを実感することが大切である。「音楽的な見方・考え方を働かせる」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情等と関連付けることである。子供は音や音楽に出合ったとき、音や音楽を聴いて自分の感情が沸き起こるのを感じ取ったり、音楽がどのように形づくられているかなどの音楽の構造に気付いたりする。その過程で音楽を形づくっている要素の働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取っていく。感じたことや考えたことを共有し、そのよさや面白さに共感する中で、得た知識を自身の音楽活動に活用していくことで、自己の考えを広げたり深めたりしていく。このように、多様な感じ方や考え方を生かしながら、音楽活動の楽しさを実感し、その楽しさを求めて音や音楽に繰り返し関わり続けようとする子供を目指す。

### 2. 子供の現状と課題（対話に着目して）

これまでの研究から、子供は、自分と異なる考え（表現を含む）や自分の中にはなかった考えと出会い、疑問を感じたり憧れを抱いたりしたとき、自ら関わりを求めてきた。その関わりとは、質問したり、友達の考えの背景にある思いや意図を確かめたりすることであり、これらを通して、友達の考えのよさを理解していった。そして、「私も〇〇（表現方法）をやってみたい」と友達の考えのよさを生かし、表現の高まりへの願いをもったとき、問いをつくった。問いをつくった子供は、「〇〇（表現方法）を取り入れると、～な音楽になりそうだ」と、自分の考えを実際に試したり、友達と確かめ合ったりしながら、問いの解決へ向かった。このように、音楽科における対話には、音や音楽、友達への憧れや自分の表現の高まりに対する願いが不可欠である。対話を通して多様な考えを共有する中で、音楽に対する感じ方や考え方を広げたり深めたりし、音楽活動の楽しさを実感した子供は、音や音楽と豊かに関わり続けていくのである。

子供は、それまでに習得した知識及び技能を活用し、思考を働かせながら音楽と関わったり、思いや意図をもって表現を工夫したりしていく。対話の土台を築くためにも、思いや意図に合った表現に必要な知識及び技能を身に付けることが重要である。そのために教師は、子供が知識や技能を十分に身に付けることができる場を保障する必要がある。

また、音楽科において、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて感じ取ったことや想像したことなどを友達と伝え合い、友達の感じ方や考え方に共感しながら、自分の感じ方や考え方を深めていくためには、言葉によるコミュニケーションが必要となる。一方で、実際に音楽を聴いたり楽譜で構造を確かめたりするなど、音や音楽によるコミュニケーションを通して、音楽のよさや面白さを実感することも重要である。子供の思いや願いと音や音楽は、密接に関わり合っているため、言葉によるコミュニケーションが音や音楽によるコミュニケーションの充実につながる必要がある。従って、対話の場面では、考えを伝え合うことと同時に実際に音楽と関わるような、音楽との関わりとコミュニケーションが往還するような学習活動の展開が重要になるだろう。

### 3. 対話を通して学び続ける子供を育てるための具体的な手立てと予想される子供の姿

#### (1) ねらいを明確にした教材を選択し、提示の仕方を工夫する

把握した子供の実態（既習経験や得手不得手等）に応じて、子供が音楽的な見方・考え方を働かせることができる教材を選択する。また、導入では、子供が興味をもち、音楽的な見方・考え方を働かせて聴くことができる部分に絞って提示したり、音楽活動のゴールを提示したりする。そうすることで、子供が必要感をもって音楽活動に取り組むことができるようにする。

#### (2) 子供が必要な知識及び技能を身に付け、考えに自信をもつために、題材構成を工夫する

子供が対話を通して自分の納得できる考えを構築するためには、思いや意図に合った表現をするために必要な知識及び技能を身に付けることが重要である。ここでの知識及び技能は、対話において共通の土台となり、表現を実現することや、視点をもって音楽を聴いたり確かめたりすること、そして、表現への自信につながる。知識及び技能が確実に身に付くように、題材構成を工夫し、音や音楽と関わる時間を十分に保障する。適宜、即興的に表現を試す場や子供の考えを共有する場を取り入れ、段階的に学習を進めていく。さらに、考えを構築する過程において、子供の思いや意図を聞き取って整理し、音楽を形づくっている要素の働きと子供の考えとを結び付けることで、考えの根拠が明確となり、子供は自分の考えに自信をもつようになる。これらの活動を経た子供は、習得した知識や技能を生かしながら音楽活動に向かっていく。

#### (3) 音楽を形づくっている要素とその働きに焦点化して、考えを共有する場を設定する

自分の考えに自信をもった子供は、考えを確かめたくなり、友達に関わりを求める。その段階で、音楽を形づくっている要素とその働きに焦点化して、考えを共有する場を設定する。その際、音楽を形づくっている要素とその働きに着目する子供の考えやその根拠を見取り、意図的指名を行う。実際の表現を聴いたり楽譜を見たりして考えを共有する中で、自分と友達の考えにズレを感じた子供は、友達の考えの意味や背景を詳しく知りたくなる。そこで、子供が互いの考えの根拠を共有できるように、教師は図形楽譜やリズム譜等を用いて音や音楽を可視化する。また、子供が友達の考えの背景等について理解することができるように、聴く視点を明確にして表現を聴いたり、対比する表現と聴き比べたりする。こうした場を基に、考えを言語化する中で、焦点化された音楽を形づくっている要素とその働きについて、互いの考えのズレの要因を明らかにした子供は、友達の考えの意味を理解し、考えのよさを共感していく。

#### (4) 子供が自身の表現を振り返り、表現に対する思いを明確にするための問い返しを行う

友達の考えのよさを実感した子供は、さらなる考えや表現の高まりを求め、自分の考えを見直すだろう。そこで、教師が「どのような音楽にしたいのか」など、子供が自分の思いに立ち返ることができるように問い返しを行う。そうすることにより、子供は表現に対する思いを明確にしながら、さらなる表現の高まりを求めて取組を進めるだろう。

#### (5) 新たに得た視点をもとに再び音楽に関わり、自分の考えを確かめる場を保障する

問いをつくる過程で、子供は音楽を形づくっている要素とその働きに対する考えを更新している。問いをつくった後は、更新された考えを基に仮説を立て、再び音楽に関わりを求める。その際、仮説を立てる子供の考えを聞く中で、考えることを全体の場で共有し、活動への見通しをもつことができるようにする。そして、子供が自分の思いに合った表現を試行錯誤し、解決へと歩みだすことができるように、再度音楽に関わる場を設ける。子供は、新たに得た視点をもとに、自身の考えを実際に試したり、友達と考えを伝え合ったりしながら、問いの解決を図る。ここでは、子供は、自分の表現と思いが合っているのか吟味したくなり、友達に関わりを求めるだろう。教師は子供の変容を見取りながら、必要に応じて見直す前と後の表現を追体験したり、聴き比べたりする場を設ける。追体験や聴き比べを通して感じたことを言語化する過程で、子供が自分の思いに適した表現になっているかを把握し、問いを解決することができるようにする。こうして、自分の考えや表現に高まりを感じた子供は、自信を深め、次の活動へと向かう。